

美術館の教育普及活動に関する研究 北海道の美術館を対象として

A study on education programs of art museums.
Through museums in Hokkaido.

○大岩郁穂¹・堀切梨奈子²・佐藤慎也²

*Ikuho Oiwa¹, Rinako Horikiri², Shinya Satoh²

Currently, education programs is one of the most important activities in many art museums. It was not until the 1970s that art museums began to place importance on experience and participation, rather than just space for viewing exhibitions. Regarding the education programs of art museums, I think that the space required has changed. I surveyed education programs at 17 art museums in Hokkaido.

1. 序論

1.1 研究背景

現在、多くの美術館では、教育普及が重要な活動のひとつとなっている。教育普及活動は、ワークショップをはじめとして、講演会などのイベント企画、鑑賞ツアー、学校との連携事業など、その内容は多岐にわたる。美術館が、ただ展示を見るだけの空間ではなく、体験や参加を重要視しはじめたのは1970年代からである。それから50年が経過しようとしている現在において、美術館の教育普及活動についても、求められている空間が変化しているのではないだろうか。

1.2 研究目的

全国の美術館において、教育普及活動で使用される活動場所や内容について実態を把握し、分析することで、美術館全体の中で教育普及諸室がどのようにあるべきかを考察する。その結果、これからの美術館教育普及諸室の計画を考えるための一助となることを目的とする。

1.3 既往研究

美術館の教育普及活動に関する研究、教育普及諸室に関する研究は、矢島慧らの「学芸員の視点からみた美術館の展示空間と教育普及活動に関する研究」^[1]や、土屋貴広らの「東京都内公立美術館における教育普及活動諸室の計画的課題」^[2]などがあるが、教育普及の活動内容と使用諸室を総括して行っている既往研究は見られない。しかしながら、今後の美術館教育普及諸室を考える上で、ワークショップなどの内容であるソフト面から、施設計画などのハード面を考える研究には、これから行われる同類の事例にとって意義があると考えられる。

2. 研究方法

2.1 研究対象

研究対象は、全国美術館会議^[注1]の正会員394館(国立10館、公立249館、私立135館)とする。本研究では、この中の北海道ブロックの美術館17館を対象として、web調査を行う。

2.2 研究方法

文献調査により、博物館教育において、どのような教育普及活動が行われているのかを把握する。また、美術館のワークショップについても、現在までにどのような変化があったのかを考察する。次に、全国美術館会議の北海道ブロック会員館17館において、各館ごとに2018年度の教育普及活動を調査する。方法としては、各美術館のwebサイトを閲覧し、把握できる活動に対して調査を行う。

3. 美術館の教育普及事業

3.1 博物館教育論

美術館は、博物館に含まれる文化施設であり、博物館法のもとで成り立っている。教育普及事業に力を入れている博物館施設は、美術館のみならず、科学博物館や民族博物館など様々である。しかし、教育普及活動において、美術館と他の博物館施設には大きな違いがある。美術館では、鑑賞をもとに物事を考える方法を伝える活動の他に、創作活動をもとに創造する力を育てる活動が行われていることである。後者の活動には正解がなく、アートの現場であるからこそ養える力であると言える。また、自由に創造することは、子どものみならず、高齢者の活動としても効果があり、幅広い年代を対象とした生涯学習の視点からも注目されている。美術館の教育普及活動の充実とともに、求め

1：日大理工・院（前）・建築 2：日大理工・教員・建築

られる施設について考えることは、これからの美術館を考える上で、重要な論点になると言える。

3.2 美術館のワークショップ

日本の美術館で、ワークショップなどの創作活動が頻繁に行われるようになったのは1980年代からである。1981年に開館した宮城県美術館には、日本で初めて美術館に“創作室”が併設された。

1986年に開館した世田谷美術館では、開館当初から意欲的にワークショップを行っており、“ワークショップ”という言葉を定着させたのもここである。当時のワークショップと現在のものとを比較してみると、完成した作品ではなく、そこに至るまでの過程を重要視しており、活動内容に大きな違いは見られない。90年代までのワークショップでは、4週にわたって固定の参加者と同じワークショップを行うものや、泊りがけで行うワークショップが見られたが、2000年代に入ってから、他の美術館でも3時間前後の内容が多い。

4. 教育普及活動の実態

対象とする活動は、2018年度に行われた、ワークショップなどの創作活動、ギャラリートツアーなどの鑑賞活動、講演会やロビーコンサートなどのイベントも含む調査を行った。調査内容は、①使用した活動場所②活動時間③対象とする参加者④参加人数の制限⑤参加予約の可否⑥参加費の6項目である。

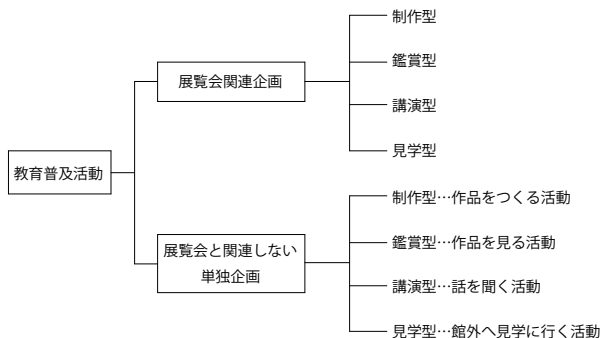


図1 教育普及活動の分類

教育普及活動には、展覧会に関連した企画と展覧会とは関連しない単独企画があり、更に制作型、鑑賞型、講演型、見学型に分類することができる(図1)。外部から講師を招く活動もあれば、学芸員がファシリテーターを担って活動するものなど運営方法は様々である。

北海道17館のうち、活動が確認できた10館に関して分類を行った(表1)。展覧会に関連した企画と単独企画では、関連した企画の方が82件と多く、その中でも鑑賞型が最も実施されている。内容は、ギャラリートツアーやトークイベントなど、展示室を利用した活動が多い。単独企画では鑑賞型、制作型が多い傾向にあ

り、鑑賞型ではコンサートを行っている事例が多く見られた。地方美術館のあり方のひとつとして、美術作品を鑑賞する美術館としての役割と、音楽を身近で鑑賞するホールとしての役割の双方を担っているためと考えられる。制作型は、関連した企画・単独企画ともに、展示室とは別の諸室で行われることが多く、研修室、またはアートワークルームなどの創作活動用の諸室が見られた。研修室は、鑑賞型・講演型でも使用されており、多様な設備が整えられていると考えられる。

②活動時間は、すべての型に共通して1~2時間で行われることが多く、参加者が集中して活動できる時間であることがわかる。③対象とする参加者④参加人数の制限⑤参加予約の可否は、制作型で提示されることが多く、参加者の習熟度に内容を合わせることで、材料の手配などの理由が考えられる。⑥参加費に関しては無料のものがほとんどだが、制作型では、使用する材料によって発生する場合がある。

表1 教育普及活動の総数(件)

館名	展示関連	鑑賞型	制作型	講演型	見学型	単独企画	鑑賞型	制作型	講演型	見学型
神田日勝記念美術館	8	6	0	2	0	0	0	0	0	0
木田金次郎美術館	1	1	0	0	0	4	0	4	0	0
札幌芸術の森美術館	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0
市立小樽美術館	4	3	0	1	0	6	3	3	0	0
苫小牧市美術館	24	8	12	3	1	5	2	2	0	1
中原健二郎記念旭川市彫刻美術館	6	2	3	0	1	2	0	2	0	0
北海道立釧路美術館	15	14	1	0	0	22	3	10	9	0
北海道立三岸好太郎美術館	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0
本郷新記念札幌彫刻美術館	19	14	3	2	0	7	3	4	0	0
有為記念館	4	4	0	0	0	14	11	1	0	2
合計	82	53	19	8	2	61	22	27	9	3

5. 結論

美術館の教育普及活動は、鑑賞活動と創作活動の両者で行われているが、それらは展覧会に関連した企画と、単独企画に分類することができる。最も行われている活動は、展覧会関連企画の鑑賞型で、展示室を利用して、展示作品の鑑賞をより深める活動が求められている。

注釈

[注1]1952年に設立した会議で、美術館の使命の実現を支え、その活動を社会的に根付かせることを目的としている。

参考文献

- [1]矢島慧・本杉省三:学芸員の視点からみた美術館の展示空間と教育普及活動に関する研究,日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.265-266, 2013.8
- [2]土屋貴広・草柳めぐみ・広田直之:東京都内公立美術館における教育普及活動諸室の計画的課題,日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.71-72, 2011.8
- [3]大堀哲・水嶋英治:博物館学II,学文社,2012.12
- [4]高橋直裕:美術館のワークショップ,武蔵野美術大学出版局,2011.12